

【NPO通信】

インドネシア教育振興会(7) 環境意識向上へ協同

2010年5月18日

インドネシアの教育、環境問題などに取り組むインドネシア教育振興会。地球環境基金の助成に支えられ、現地で過去三年間、現地の村人を主役に、環境意識の定着に向けた活動(インドネシア・西ジャワ州バンドンで、バイオマスを利用した循環型社会形成のための実践)をしてきた。

インドネシアは世界第四位、二億三千万人の人口規模を誇るが、その半分以上を占める農民の34%が貧困人口とされる。

当会の活動対象のバンドン山間部の村も、小作農中心の極度の貧困地域にある。水道などのライフラインは未整備で放置され、食品廃棄物や家畜排せつ物の現代的な処理施設もない。異臭をはじめ感染症の流行など、生活環境への悪影響ははかりしれない。

長期間、このような状態に置かれてきた村人や子どもたちの環境意識は先進国の基準からすると低く、環境の改善に向ける意識も芽生えにくい。当会の活動が目指すのは、このような人たちに環境意識を根づかせ生活向上の「導きの糸」になることだ。

その姿勢は、かつての大英帝国がインド植民地の人々を教化したような「上から目線」ではない。当会は、現地の人々との協同を重視する。

例えば、食品廃棄物や家畜排せつ物を利用したバイオマス農園とトイレを整備した際も、小学校の空き地で作業に臨む主役は、村人たちだった。こうした協同で、「ごみの減量と投棄防止」というテーマが、北(先進国、当会)と南(途上国、村人たち)、それぞれの参加者にそれぞれの意味をもって浸透していった。

五月現在、人口千五百人のこの村には、「3R(reduce・reuse・recycle)」に進んで取り組む三十五人のリーダー(小作農)、六人のリーダーサポーター(村の小学校教員ら)がいる。これらの人々と外部ボランティア(環境技術の役人)による3R推進委員会を、当会がイスラム教育大学の教員、学生とともに支援し、環境問題と循環型社会について村人の共通理解を目指す体制も整った。

本年度は3R推進マニュアルを完成させ、住民勉強会や小学校での公開授業など、子どもから大人までが参加する実践・教育活動を展開する。十月には都市部のバンドン市に進出し、富山の3Rの取り組みや村人らの環境改善活動報告などを交え、二百人規模のセミナーを開くという。

「途上国」における循環型社会形成のさきがけを目指し、「先進国」日本の富山という一地方に誕生したインドネシア教育振興会は今、意気盛んである。(富山大学人間発達科学部教授・根岸秀行)



バイオマス農園のコンポスト作業場＝インドネシア・西ジャワ州のバンドン山間部で

PR情報

企業のプロが疑問に答えるQ&Aサイト【お悩み相談室】→回答をみる
まさかの価格破壊！35歳(男性)月額970円の死亡保険の真相。